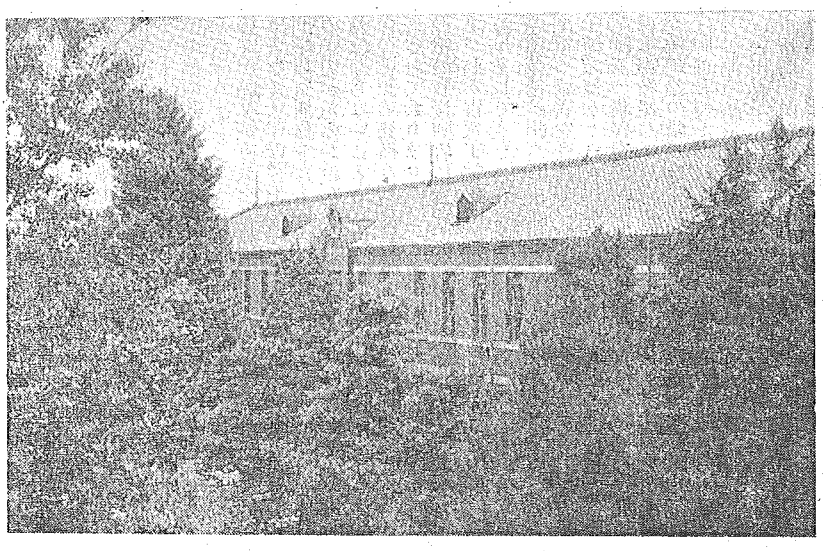
洛友會報

京都市左京區吉田
京都大学工学部
電気科教室内
洛友会



京都大学電気科教室から約二千人の卒業生が出た。その育んでくれた建物の面影を見れば懷旧の情に堪えず感慨無量である。赤煉瓦、石の白線。吉田山が直接のバック。大文字山、比叡山鞍馬山、愛宕山などが見守つている景勝の地である。写眞は日の字形の西側を南から北にかけて見た処。中央が玄関。（二八・七・一五写）

挨拶

會長　鳥養利三郎

私の長い世渡りから見て、人と人とのつながり位大切な、そして有り難いものはない。まして、同学同門の好みは、それが偶然の運命的なものであるにしろ、吾々を、どれだけ力づけておるか、今更言を要しないと思います。

外国の大学では、同窓会が母校に対し、同窓生に対し、ひいては社会に対して、非常に大きな力添えをしている様であるが、日本の大学では、今まで同窓会は殆ど顧みられなかつたようである。今回皆様の周到な企劃と熱情によつて洛友会が結成せられるに至つたことは欣快に堪えないところであります。その将来の活躍と成果は大に注目されるものがあります。

皆様の熱心なおすゝめによつて、私は遂に会長の重責を荷うに到りましたが、切に御鞭撻と御援助を御願い申上げます。

同窓会は、卒業生間の、横と縦との連絡を主なる目的とするものと思いますが、横の連繋は同級生会が主として担当出来ますから、同窓会は、主力を縦の連絡協調に置くべきであろうと、考えます。明治の老卒業生から、昭和二十年後の青年卒業生まで、すべてを打つて一丸とし、これ等すべての同窓生を、親愛のルツボに熔かし込むことに努めなければならぬ。老若お互の間に少しでも遠慮や気兼ねが残つてはなりません。この意味において、私は同窓会での食事には席を設けず、カクテル・パーティー式、園遊会式にして、自由に誰とでも快談出来るようにして頂き度いと思います。

国立大学では、同窓会の結成は、まだ例が少いようでありますから、この洛友会の発展如何は一のテスト・ケースとも見られると思います。切に皆様の御盡力を御願い致します。

洛友會會報の発刊を祝して

副会長　加藤信義

京都大学工学部電気工学科は明治三十一年に創立せられてから五十五年になりますが、その間に卒業生を出すこと二千名になん／＼としておりまして、わが国の全地域にわたり或は官界に或は各種の事業界に活躍され、電気工学の発達に貢献する処が大でありますことは誠に御同慶に堪えぬ次第であります。

ところが最近卒業生各位の感り上る力に依りまして、各地の同窓会を糾合して昨年十一月二十三日母校において全国的な同窓会が誕生致し洛友会と名付けられました。その後、本年二月十二日東京において東京支部が発足し、続いて四月十五日に大阪で関西支部が生れました。その外既に名古屋においても中部支部が発足いたしました。これは鳥養会長、佐藤東京支部長、石川関西支部長、及び清水名古屋支部長を初め発起人各位の絶大なる御盡力の賜でありまして、これに対して教室を代表して深甚なる感謝の意を表する次第であります。

私は本年度は電気工学教室の教室主任でありますので、この機会に教室の現状を御報告申上げ洛友会会報創刊の御祝の御挨拶を申上げたいと思います。

わが電気工学科は新制大学専門課程として、昭和二十五年に最初の学生六〇名を收容してから二年半許り、旧制と新制との二本建でやつて参りましたが、本年三月に最後の旧制大学の学生六〇名を卒業さし、また同時に新制大学の学生五三名を卒業さしまして本年四月からは新制大学一本建となつたのであります。尤も休学その他で若干名の旧制の大学生が残つておりますが、これは本学年度で大体片付けると云うことになつております。

新制大学では在学四年の中最初の二ヶ年間は宇治および吉田の分校で、教養学科を修業致し残りの二ヶ年間は電気工学教室で専門学科を履習することになつております。専門学科の履修期間の長短からいえば新制大学は旧制大学より授業時間が短いので、学力が低下しておると考えられ勝ちでありますが、この授業時間の不足は教育の方法を改善して、例えば教科書やプリントを使用する等色々と工夫して学力の低下を防いでおる次第であります。また新制大学では人文系、社会系、自然系、の教養科目を全科目の約三分の一程履修して視野の広い立派な人間を作るということをその目標としておつて、卒業後社会に出れば指導的人物となり得る基礎がここで築かれる訳であります。また今年五月一日からは修士課程の大学院が発足致しまして、強電流工学を専攻するもの八名と、弱電工学を専攻するもの七名とで合計一五名の大学院学生が入学致しました。こゝで二ヶ年間勉学致しますと修士の学位が得られます。更に三ヶ年勉学致し論文が通過すれば博士となり得る博士課程が発足することになつております。新制大学院においては博士の学位を得るには学士となつてから少くも五年間

に五〇単位の学科に合格致し、その上に独創的の論文を提出致しこれが大学院の論文審査会を通過する必要があります。即ち新制度の博士は論文の通過と専門学科に及第することを必要と致します。従来の論文博士はこれで無くなるかと申しますと、大体新制大学院卒業の新博士が出来る昭和三十三年頃までは存続されることになつております。昭和三十三年以後はその儘の論文博士制度が存置されるかと云うとそうでなくして、提出論文が論文審査会を合格通過する許りでなく大学院において五ヶ年間専門学科を履修したものと、同等以上の学力があるか否かの試験に合格せねばならないこととなります。然しこの改正の正確な時期はまだ明らかにされておりません。

次には教室の教授陣容について説明致します。わが電気工学教室には七講座がありまして、その第一講座は大久保達郎教授が担当し主として発電送電配電の講義を受持ち、第二講座は林千博教授がこれを担当致しまして電気機器の講義を受持ち、第三講座は林重憲教授がこれを担当し電気磁気交流理論の講義を受持ち、第四講座は阿部教授がこれを担当し電気材料と計測の講義を受持ち、第五講座は松田長三郎教授がこれを担当し電燈照明及び電力応用の講義を行い、第六講座は加藤信義教授がこれを担当し無線通信の講義を行い、第七講座は最近日本電信電話公社の電気通信研究所の基礎研究部長より転任された前田憲一教授が担当し有線通信の講義をしております。

私は教室幹事として御願ひ致しますが夏休みには恒例によつて四回生の学外実習が実施されますが、学生の全部がこれを終えないと卒業が出来ないことになつておりますので、卒業生の各位におかせられましては実習に関し十分の御便宜を与えられますよう御願い致します。

次は就職の問題でありますが、これは本年からは日本工業教育協会の取りきめによりまして、全国の大学の工学部と会社とが協定を作りまして十一月以降でないと就職の正式の交渉は開始されないことになると思いますので、大学も会社もこの約束を堅く守つて学生が就職のために煩はされることなく、四回生の前期までは専心学問に専念出来るよう御協力を御願いする次第で御座います。

これをもちまして私の御挨拶を終ります。

ヒューマン・リレーション

副会長兼関西支部長　石川芳次郎

二十世紀後半に入つてから世界は米国にリードされている。その米国はこゝ一世紀苦学生のように働いて働いて働き抜いて、その上管理組織の上にも科学的機械的能率向上の一途を辿つて、ついに世界一の富者になつた。その米国も能率至上主義は一寸行きづまりを来し、今日までの能率至上主義だけでは何か不足である、ヒューマン・リレーションの問題が不足であると云うので昨今この問題が大きくとり上げられて来た。結局これは人類の一進歩であるが、工場経営管理の上に能率を更に上げる方策ともなるようである。物質文明が極度に発達して止る所を知らない今日においては、吾々は偉大なる発明発見が窮極において果して人類の幸福を齎すかどうかということに一抹の不安を抱き始めて来たことも事実であるが、世界の人の世界観が変つて来たことも、事実である。こゝで世界の人々が共に平和に仲良く暮して行くためには、人の法則が物の法則に優先しなければならぬというのである。吾々の恩人である電気学界の天才スタインメッツ博士に、ある人が「将来行われる最大発見は何であるか」と聞いた処、即座に「それは道徳、精神社会の領域に属するものと思う。吾々は今日まで外的な法則を拓いて来たが今後は内的な法則を開発すべきである」と答えたということである。高度の文明を誇る米国の貨幣の表面に「協力」「信仰」「自由」の三つの標語が刻まれていて、これを民主主義の三脚としている。人と人との間の暖い関係が民主主義の基底でなければならないとされている。私共は電気工学を専攻して、それ〴〵の分野において我国文化の向上に盡して来たものであるが、現在の国際状勢と我国の置かれた環境から見て、今までの個々の活動丈では充分と云えない。どうしても協力によつて国家社会のため、世界人類のためサービスすることの必要が痛感される。最も多く奉仕したものが求めずして最も多くを与えられることは自然の法則である。このような活動をするためには私共は屢々会合してサービスの機会を得て、サービスの方法を工風することが必要になつてくる。かような意味においてわれわれ同窓がヒューマン・リレーションズの目的達成のために洛友会を結成して、会合の実施と会報の発行等によつて協力の体制を造り上げることは実に有意義なことゝいわねばならない。

この会の発起に当つて東京及大阪在住の方々と教室の方々の熱心なる御盡力に負う所甚だ大である。殊に山村忠行君のネバリ強い努力と事務的経営的手腕が貢献したことは大なるものであつたと思う。本会の設立に際し会の前途を祝福すると共に、上の発起に盡力された諸賢に対し最大な敬意と深甚の謝意を表するものである。

討議歓迎

副会長兼東京支部長　佐藤穩德

会員の連絡ということは、それ自体すでに会の目的でもあるが更にそのさきの目的のための基盤でもある。良い連絡ということについては、理論的な立場からまた運営的な立場からいろ〳〵考えられると思う。前者は会のあり方とか会員の考え方とかについての理念的な立場からの問題で論議は甚だ多いと思う。これ等の論議が時には説法的もよし警告的もよし大いにこの会報を飾る事になつたら稗益するところ大であると思う。後者は何をどうすればよいかの立場からの問題であるが、これは具体的な問題であるから会報上に提案と討議を歓迎したら運営上直接に資すること多いと思う。東京支部今までの話題は悉くこれに属するもので、役員幹事の選任、幹事の分担方法、会費、基金、クラス会との連絡、趣味の会合、事務所等色々さまざまであるが、明日の問題また夢として持ちたい問題として益するところが多かつたのである。

この会報も学術的記事、状況報告等各種の記事がのせられることゝ思うが、これと並んで上記の如き提案と討議で賑つたらお互に指標と反省を与えられることになると思う。

洛友會の誕生をよろこぶ

中部支部長　清水勤二
（名古屋工業大學長）

人生にはいろ〳〵な機縁がありますが、血を分けた血縁と、故郷を同じ、いろ同郷の縁と、学窓を共にする同窓の縁とは人生の三大機縁であると思います。同窓の機縁の中でも、最後の学校生活を共にした同窓の機縁は、同じ専門によつて社会に立ち、多くは同じ種類の職業にたずさわることから、交渉も多く、相助け相励み、険しい人生行路に、「おい」「やあ」とさわやかな会話に始まつて、利害を外にして親しさに時を忘れる人生のオアシスでありまして、年と共に深さを加える大きな機縁であると思います。

このたびわが母校の京大電気工学教室の同窓会に洛友会の多称がつけられ、東京、関西、中部にそれ〴〵支部を設けられましたことは、まことに御同慶に堪えないところでありまして、この発足に御盡力いただいた各位に深甚なる敬意と感謝とを表するものであります。

わが中部支部は愛知、岐阜、三重、静岡、長野の五県に在住する同窓をもつて組織しておりますが、現在分明している会員は明治年代卒業の会員が二名、大正年代に卒業の会員が二十七名、昭和年代卒業の会員が四十七名、全部で六十九名であります。東京、関西に比べましては、甚だ貧弱であると思いますが、戦後の中部地区の工業の発展は目ざましいものがありまして、今後ぞく〳〵同窓のふえてゆくことを期待しております。

終りに、鳥養会長はじめ同窓各位の御健康と御発展とを祈り、同時に電気工学教室の御発展を心から祈るものであります。

△洛友会

同窓会の名前を、何んと付けるかについては、仲々八釜敷かつた。名前も八つか九つか持ち出された。中には牡丹会と言うのが古い先輩から提出された。洛友会というのは何処とかにあると言うとそれは楽友だなどと等々。

京都大學工學部電氣工學科

洛友會々則

第一条　本会は洛友会と称する

第二条　本会の事務所は京都大学工学部電気工学科教室に置く

第三条　本会は会員の親睦を図り、学術文化の発展に寄与することを目的とする

第四条　本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う

一　会報を作成し会員に配布する

二　名簿を作成し会員に配布する

三　大会を年一回開催する

四　その他本会の目的を達成するに必要な事業

第五条　本会は左の会員で組織する

正会員　京都大学工学部電気工学科卒業生ならびに本会の役員会において承認を経たもの

賛助会員　本会の事業を援助する法人または個人

第六条　本会に左の役員を置く

会長　一名

副会長　若干名

評議員　若干名

第七条　会長および副会長は役員会の議を経て推戴する

評議員は卒業年度別に選出する

第八条　会長は会務を統轄処理する

副会長は会長を補佐する

評議員は会長の諮問に応える

第九条　会長は本会の事務を処理するため幹事若干名を委嘱する

第十条　役員の任期は二年とする。ただし重任を妨げない

第十一条　本会は会費および寄附金をもつて経理する

第十二条　正会員の会費は年額三〇〇円とする

第十三条　本会の会計年度は毎年十月一日に始まり翌年九月三十日に終る

第十四条　本会の決算は年次大会において毎年報告する

第十五条　本会は地域別に支部を設けることができる

各支部の会則は本会則に準じて支部において作成する

第十六条　本会則の改正は総会の決議を経ることを要する

附則

本会則は昭和二十七年十一月二十三日から実施する

役員名簿

会長　鳥養利三郎

副会長　石川芳次郎

副会長　佐藤穩德

副会長　加藤信義

幹事　山村忠行

〃　工藤寿男

〃　岐美忠雄

〃　大谷泰之

〃　近藤文治

評議員

明三五　清水荘一郎

三七　多田耕象

三九　岡村金藏

四〇　初見三郎

四一　野田清一郎

四二　鈴木德之助

四三　石川芳次郎

四四　大森　丙

四五　小田鳥修三

大元　鳥養利三郎

二　宮崎駒吉

三　鎌居大藏

四　高沢庫吉

五　中村為嗣

六　大西多藏

七　乙葉偵一

八　高見祚平

九　菅琴二

一〇　岩垂好德

一一　島居金次郎

一二　小森修二

一三　巽清水勤二

一四　本多良知

一五　石川辰雄

二　交川有

三　笠井元治

四　久野清

竹上武雄

五　潮江尚正

六　藤田偵

七　小柳美一

八　田中信高

川端太郎

九　石川弘文

一〇　清水威寛

一一　中山健一

一二　黒川武夫

一三　松尾三郎

偵弓克巳

一四　筑木二郎

田中哲郎

一五　山村龍男

北瓜隆夫

一六三　副島民彦

岡本弘

一六二　吉岡忠

尾繩貞男

一七　太田英男

中沢清麿

一八　植田勝比古

河原勇

一九　松本登

川合潔

二〇　磯野寿

宗雪満夫

二一　大藤高文

下村孝一

二二　木村清治

高木俊宜

二三　河野義德

三浦宏

二四　北野豊

井関昇

二五　沢田新一郎

萱島敬一

二六　笹岡健三

木島昭

二七　野村卓也

電気教室

松田長三郎

阿部清

林重憲

前田憲一

加藤信義

大久保達郎

林千博

洛友會東京支部會則

第一条　本支部は洛友会東京支部と称し本部の目的、事業を遂行する

第二条　本支部所属の会員は左の範囲とする

一　東京都、神奈川、千葉、茨城群馬、栃木及び山梨各県在住の会員

二　新潟、長野及び静岡各県在住の者で本支部所属を希望する会員

第三条　支部総会を毎年一回五月に開催する

第四条　本支部に左の役員を置く

支部長　一名

副支部長　若干名

評議員　若干名

第五条　支部長及び副支部長は役員会の議を経て推薦する

評議員は支部総会において卒業年度別に二名以内を選出する

第六条　支部長は部務を統轄処理する

副支部長は支部長を補佐する

評議員は支部長の諮問に応える

第七条　支部長は本支部の事務を処理するため幹事若干名を委嘱する

第八条　役員の任期は二年とする、ただし重任を妨げない

第九条　本支部は会費及び寄附金をもつて経理する

第十条　支部会費は年額一〇〇円とする

第十一条　本支部の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第十二条　本支部の決算は支部総会において報告する

第十三条　本会則の改正は支部総会の決議を経ることを要する

附則

本会則は昭和二十八年二月十二日より実施する

役員名簿

支部長　佐藤穩德

副支部長　乙葉偵一

評議員

○印は本部評議員を兼ねる　△印は幹事

明三五　○清水荘一郎　小林久治

三七　○多田耕象　清水義一

三九　○岡村金藏　中島卓爾

四〇　○初見五郎　宮井誠吉

四一　○不破一気　山田鉉一

四二　○鈴木德之助

四三　○佐伯政之助　籠口穩德

四四　○大森丙　○佐藤正康

四五　○山下行雄　古田春彦

大二　○宮崎駒吉　尾崎正隆

三　○長島正隆　片木久吉

四　○高沢庫吉　小笹進

五　○中村為嗣　伊沢辰雄

六　△○大西多藏　久高將吉

七　△○乙葉偵一　楠本宗次郎

八　○高見祚平　神保成吉

九　△○菅琴二　堀岡正家

一〇　○岩垂好德　池内是憲

一一　○島居金次郎　今村康隆

一二　△○小森修二　土方鹿之助

一三　△○巽良知　三浦倫義

一四　△○田近哲三　沢山義一

一五　○石川辰雄　歌原誠一

昭二　△○交川有　難波捷吾

三　○笠井元治　白井好巳

四　△○久野清　東美男

五　○潮江尚正　中村靖之

六　○藤田偵　野際幸雄

七　△○小柳美一　△吉岡俊男

八　○田中信高　清生朝郷

九　○石川弘文　川村孝三

一〇　○清水威寛　佐々木卓夫

一一　○中山健一　森元行

一二　○黒川武夫　木正知巳

一三　△○松尾三郎　副島敏夫

一四　△○筑木二郎　稲葉宗平

一五　○山村龍男　肥後大介

一六三　○副島民彦　△大塚恭二

一六二　○吉岡忠　松重聰香

一七　△○太田英男　影山慈行

一八　○植田勝比古　上之園親佐

一九　○松本登　△金田弘

二〇　○宗雪満夫　福井常勝

二一　○大藤　高文　藤原　素造
二二　○木村清治德　増田　孝雄
二三△○河野　義德△細田　寛勝
二四△○北野　豊　太田　実
二五　○沢田新一郎　久民　実
二六　○笹岡　健三　山中　卓
二七△○野村　卓也　富沢　理

洛友會中部支部會則

第一条　本支部は洛友会中部支部と称する

第二条　本支部の事務所は名古屋市昭和区御器所町名古屋工業大学電気工学教室内に置く

第三条　本支部は会員の親睦を図り当地方の学術文化の発展に寄与する事を目的とする

第四条　本支部は前条の目的を達成する為次の事業を行う
一　本部との連絡及協力
二　支部名簿の整備作成
三　年一回総会を開く
四　其他本支部の目的を達成するに必要な事業

第五条　本支部は左の会員で組織する
正会員　中部地区（愛知県、岐阜県、三重県、静岡県、長野県）在住の京都大学工学部電気工学科卒業生及本部の役員会に於て承認を経た者
賛助会員　本支部の事業を援助する法人又は個人

第六条　本支部に左の役員を置く
支部長　一名
副支部長　一名
幹事　若干名

第七条　役員は総会の議を経て定める

第八条　支部長は支部業務を統轄し副支部長は支部長を補佐する、幹事は支部長の命を受け事務を処理する

第九条　役員の任期は一年とする但し重任を妨げない

第十条　本支部は支部会費及寄附金を以て経理する

第十一条　会員の会費は年額二百円とし本部会費年額三百円と共に会計年度の初めに納入するものとする

第十二条　本支部の会計年度は毎年十月一日に始まり翌年九月三十日に終る

第十三条　本支部の決算は毎年総会に於いて報告する

第十四条　本支部会則の改正は総会の決議を経る事を要する

附則
本会則は昭和二十七年十二月十三日より実施する

役員名簿

支部長　清水　勤二
副支部長　本多　静雄
幹事　木村　章介
同　竹上　武雄
同　竹下　亀蔵
同　川端　太郎
同　伊藤　久照
同　外山　敏夫

洛友會關西支部會則

第一条　本支部は洛友会関西支部と称する

第二条　本支部の事務所は京都大学工学部電気工学科教室に置く

第三条　本支部は本部の目的および事業を遂行するための必要な協力をする

第四条　本支部は前条の目的を達成するため次の事業を行う
一　本部との連絡および協力
二　支部名簿の整備作成
三　年一回総会を開く
四　その他本支部の目的を達成するに必要な事業

第五条　本支部は左の会員で組織する
京都府、大阪府、兵庫県、奈良県和歌山県および滋賀県に在住する会員

第六条　本支部に左の役員を置く
支部長　一名
副支部長　二名
評議員　若干名

第七条　役員は総会で定める

第八条　支部長は支部業務を統轄する
副支部長は支部長を補佐する
評議員は支部長の諮問に応える

第九条　支部長は本支部の業務を処理するため幹事若干名を委嘱する

第十条　役員の任期は二年とする、但し重任を妨げない

第十一条　本支部は会費および寄附金をもつて経理する

第十二条　会員の会費は年額一〇〇円とし、本部会費年額三〇〇円とともに会計年度の始めに納入するものとする

第十三条　本支部の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第十四条　本支部の決算は毎年総会において報告する

第十五条　本支部会則の改正は総会の決議を経ることを要する

附則
本会則は昭和二十八年四月十四日より実施する

役員名簿

支部長　石川芳次郎
副支部長　一本松珠璣
副支部長　工藤　寿男

評議員（○印幹事）

明四一　野田清一郎
四三　石川芳次郎
四五　山岡　景範　道田　貞治
大二　建部　貞二　堀　鹿造
三　鎌居　大蔵　村野　貞朗
四　石沢　四郎　石黒　九一
五　七里　義雄　稲田　虎彦
六　辻　忠夫　○山村　忠行
七　○工藤　寿男　佐藤　一男
八　仙石　甲三　山本島之助
九　林　堅太郎
一〇　山田　一夫
一一　大山　駿介　林　正一
一二　○今田　英作　幸前　治一
一三　○岐美　忠雄　菊地　保夫
一四　一本松珠璣　木津　圭蔵
昭一五　○小宮　義和　前田　安道
二　栗本　順三　○西枝　一江
三　○森　薫　村岡　正吉
四　○山県　敏夫　高田　信男
五　○朝山　宗一　野田忠次郎
六　上西　亮二　大西　正一
七　浅田　英直　和田　昌博
八　田井　梁之　塩見　武夫
九　阪本　勇　旭　晴晃
一〇　香山日出雄　中堀　孝志
一一　福中　希生　櫻井八太郎
一二　中野常太郎　土田　幾久
一三　眞弓　克巳　佐々木　正
一四　田中　哲郎　堀　眞幸
一五　板倉　清保　小南　充夫
一六　眞砂野　昭　嘉田　隆美
一六二　加藤　孝一　野田　忠弘
一七　中沢　清磨　○珠玖　泰吉
一八　氏原　岩雄　広田　通
一九　川合　深　松原　行雄
二〇　清水幸四郎　小原富重郎　一夫
二一　下村　孝一　藤本　俊宣
二二　阪元　宣載　高木　泰
二三　三浦　宏　深井　寺西　謙三
二四　関　章良　森島　省三
二五　大谷　清二　杉山　和夫　○竹山　宏
二六　杉山　和夫　○竹山　周作
二七　栗原　英三　原　周作

☆　☆　☆

同窓會

同窓会が今日まで出来なかつたことが、今更のように不思議に思われてならぬ。

袖振れ合うも多少の縁と言い、或は、一樹の陰の縁などとも言われている。ましてや、三年間を同じ教室で学んだことを考えれば、多少の縁でなく深い縁である。同じ大学の電気を学びながら、東大でもなく、九大でもなく、京大であつて見れば、それこそ「いんねん浅からぬ縁」だと思う。

小学校の同窓会。我々大学出身の者には縁が薄い。それは会員の素質が余りに、まち〳〵であるのと、小学校の土地から遊離したような社会的地位にある人が多いからであろうか。

中学も、小学と似たようなものであろう。

高等学校となれば、大分、身近な感じで、この種の同窓会は割合に盛んなようである。

大学の同じ教室の同窓は、社会的にも大いに連絡があり、同窓会としては最も緊密なものであるべきである。義務もなく、強制せらるゝものでもない同窓会は、余程熱心な卒業生がいないと成育せないものだ。何か同窓会みたいのが欲しいと言うので、クラス会が、色々の年代で催されている。

熱心なクラス会は、それのみでは物足りないので、その前後の年代を集めたクラス会が出来ている。

卒業生の大部分が、心の底に、全年代の同窓会が欲しい気持が浮いている。

東京地区では、こうした気持が盛り上つて、全年代の局部同窓会が育つていた。そこへ、愈々、全卒業生に関連することが起つたのである。

洛友會々費領收

（七月一日現在本部到着の分）

明三七　多田耕象
四三　瀧口三雄
四四　大森丙
大二　宮崎駒吉
三　長島正隆
四　入江源薇
五　笹原彌一郎　偃崎尚忠
六　大西多藏
七　石井浅八　締本宗次郎
八　高見祥平
九　管琴二　松本久長
一二　池田経喜　小森修二　大内誠三
一三　俵三九郎　巽良知
一四　岡本一郎　田近哲三　樋口竹太郎　西原藤吉
一五　石川辰雄　歌原誠一
昭二　岩本種昌　交川有
三　山崎愛三　笠井元治
四　富山良太郎　馬淵良
五　飯田善作　久野清
六　足立卓夫　宇野茂道
七　藤田偃　小柳美一
八　蒲生朝鄉　高尾磐夫
九　辻田正一

一〇　川村三　小林光正　清水威寛　林潔
一二　岩元嚴　東長年
一三　伊藤英太郎　平野彰
一四　村岡勝　岩田稔　稲葉宗平　高崎勲　横山義一
一五　藤田隆正　肥後大介　相木一男
一六三　大塚恭二　河辺一
一八　南部一郎　安藤安二　江副卓爾　村田孟
一七　鵜飼重孝　影山盛行
一八　荒井清次　糟谷續　市原嘉男　川合幸彦　清水潤治
一九
二〇　大瀧侃　南野幸雄　広田方孝　原田常夫
二一
二二　木村清治
二三　香川正明　土信田存　細田寛勝
二五　久民実
二六　笹岡健三
二七　岡本明　野村卓也　中田高義
二八

重見通雄　佐野一雄　植田正一　正木知己　平田穣　副島敏夫　齋所正夫　石谷昇　黒柳昌之　筑木二郎　蓑井胤景　山村龍男　岡本正彦　武田進　松軍聰香　甲斐靖造　小穴正一郎　福士良　太田英男　島田和夫　植田勝比古　田口守　岩谷英一　川合深　山根清　渡辺進　老田他四郎　大藤高文　河野義德　都木周作　松本忠孝　沢田新一郎　松尾哲男　富沢理

賛助會員（その一）

三菱電機株式会社
株式会社　西島製作所
株式会社　日立製作所
東京芝浦電気株式会社
株式会社　高岳製作所
宇部興産株式会社
富士電機製造株式会社
電業社原動機製造所
神鋼電機株式会社

関東電気工業株式会社
日本電設工業株式会社
株式会社　間組
前田建設株式会社
西松建設株式会社
大成建設株式会社
株式会社　熊谷組
国際電気株式会社
中部電力株式会社
北陸電力株式会社
新電元工業株式会社
鵜川電柱株式会社
株式会社　東京造船所
株式会社　京三製作所
日本信号株式会社
日本電業工作株式会社

東光電気工事株式会社
日本工営株式会社
東京電気工務所
株式会社　コロナ社
新生電業株式会社
住友共同電力株式会社
東洋通信機株式会社
森岡興業株式会社
株式会社　山形組
兒玉工業株式会社
株式会社　勝呂組
勝村建設株式会社
四国電力株式会社
日本機械貿易株式会社
株式会社　明電舎
白石基礎工事株式会社
株式会社　巴組鉄工所
那須電機鉄工株式会社
電源開発株式会社
九州碍子株式会社
三葉能率電機株式会社

老教授の頭

教室の先生で老の字をつけるとアイウエオ順で、阿部教授、加藤教授、松田教授の三先生であろう。一寸見ると林（軍）教授も這入りそうだが見かけによらぬ若いのである。

阿部先生の近来は、チタンで頭が一杯なので、だん〳〵毛が生えている余地がなく、頭の艶も、特別研磨のチタン色だ。アルコールで呂律が廻り兼ねるようになると、だん〳〵チタンの地金に近い色になる。

加藤先生は、朝鮮生れじやないかと言う人がある。聞いて見ると白頭さんだという。アジヤー。あれで先生は白髪を気にした時代があつたと言うことだ。白髪染めの何とかいう広告が目について、これなろ哉。しかし、かぶれるケースがあるので夏休み直前に、気兼ねしながら奥さんに染めて貰い、鏡を見てニンマりしたのがクライマックス。

忽ち、かぶれて皮膚は赤くなり怪しげな姿となり、夏休み中、家に引きこもる……。以後白頭。

松田先生が一方の前腕で腹に一文字を書き、他の手で頬ツペたを愛撫するポーズで、頭を見ると黒くて青年のような感じ。ホルモン剤？強力な電磁で細胞その他のリアレンヂメント？

照明の権威者だから、毛を黒くするウエーヴ？だろうかと確証がつかめぬので残念だ。（S生）

こんな最中に会報を創刊しようと、頭を集めて協議をした。さて集つた頭を見ると、毛の薄い、いや不毛の地に近いような、しろもの。こんな古い頭じや会報が続いて出ますかねと言いたくなるし、また、言われても仕方があるまいて。全くそうなんだ。若い、はつらつとした会員が中心となつてやるべきである。それでこそ、会報は続きますよと言える。

若い人達は、未熟だから、老先輩を差し置いては、と敬遠する。いや、そんな厄介なことをするよりメツチヘンと遊んだ方がよいと打算するだろう。

一寸脳道に反れるけれど、今の学生及び若先輩は、メツチヘンとゲルトが飯より御好きなのだ。

この春だつた。学生の実習報告を聞いた。十名位、演壇に立つて報告したが、よいメツチヘンがいたの、ふられたの、駄目だつたのと、うぬぼれたり、ぼやいたりである。更に、実習先で貰つたゲルトが多かつたの、少かつたの、どの会社よりは安かつたのと言うのが大部分であつた。

こんなことを書くと、古い先輩は恐らくビツクリせられるだろうと思う。古い先輩は、メツチヘンたのゲルトだの口に出したら、けいべつされたものだつた。……

一体、会報見たように何等の強制力のないものを永続させるにはどうしたらよいかということになる。問題は簡単である。その人を得ることである。

偽にぎせいになつて親身にこれを育てゆく誠意のある人を探すことである。そのためには老人が罷り出で、先ず、創刊に携つて、よも〳〵動いて、力の盡きぬ間に若い人が肩代りをすること　である。

こう書いて　こと、若い人で、血をたぎらして、ヨシ俺がやつてやろうというヴォランテイヤが出現するような気がしてならない。我等の電気教室から棄立つた人には、きツとそんな人が御来迎のように現はれる予感がして、握つたペンが感動するのである。

会員の皆様が、何ごとによらず通信して下さるならば、永続することは請合いである。（編集老僧）

教室の思い出（投稿歓迎）

カラクリ

ときたま暇の折、ラジオを聞く。ダイヤルを廻はしていると、ヒヨツコリ徳川夢声の独演が流れ出ることがある。そうすると難波正先生を思い出す。水の流るゝような講義ぶり。声色も先生には惜しい位魅力があつた。ゼスチユーアというより、外国に行つた時、相手によく判らせようとする手振り、手の廻し方だが、それが目に残つている。これは先生の学生に対する親心の表現であつたろう。

先生によつて、それ〴〵癖はあるが、難波先生は「機械」或は「マシン」（茲ではフランス語のマシンのことを「カラクリ」と講義に言われた。先生はフランス仕込みだけに（聞く処によるとフランスではラヴアジエに教えを受けられたという）文献もフランス物が多かつた。

カラクリというのは筆者のような老卒業生が、少年時代に、よく聞きよく使つた言葉ではあつたが、科学の尖端を行く電気教室で聞くと異様な感じであつた。

電気の教室から、文学部へフランス語を教えに行かれたとのことを聞いたので、余程フランス語が上手だつたと見える。

筆者は在学中、たつた一度だけ、教室を離れて、先生と親しく話したことがあつた。

それは牡丹会の夕のことであつた。今の教室は我々の時代は平家で口の字形の建物だつた。従つて四角な美しい中庭があり、ぐるりと牡丹の花壇があつた。牡丹の花が咲くと、先生と学生と一所に盃を傾けるという、なごやかな、他所の見る目も羨しい、世にも珍しい情景があつた。どうしたハズミか、筆者が難波先生の隣に坐らされた。

牡丹の花に酔い、酒に酔うと、つい心易くなり、筆者が思わず

「先生がフランスにいらつしやいました頃は、サラベルナールが若くて美しく、御通いになりましたでしよう……」と水を向けると、先生はキツとなられて、

「何？サラベルナール？グランヂユーマの棒姫……」と言つて、急に緊張を解かれ

「君はサラベルナールのことを知つてるのか。ウン。電気の学生にサラベルナールを知つてる奴がいるとは嬉しい」と言われて筆者も、ほツとしたことがある。当時青柳先生は独乙仕込、小倉先生アメリカ仕込、本野先生フランス仕込みと、電気教室にも、色の塗り分けがあつた。

ソレワ

教室の窓から学生が、来られるかなと首を突き出して片ずを呑んでいる。大学生になつても、講義が休みになると小学生見たいに喜んだものだ。「あツ見えた」

自転車を走らせて大急ぎの青柳先生の姿だつた。

先生は教室に這つてノートをひらき開口一番

「そレは……」とある。学生目をぱち〳〵。多分、独乙語は Es ist……で始まるからだろう。先生の「それは……」が耳に残つている。（H生）

クラス会便り

信友会

大正七年卒業のクラス会で年一回以上集つている。来年は三十五年に当るので、家族引き連れ会合する予定で当番幹事は秘策を練つている。

○

大一三　菊池保夫

我々のクラス会は、五年毎に開いて、その親睦を図つている。そしてこれは確実に行つているので、その年のスケヂユールに組み込むため、仲々盛んである。五年と言えば長すぎるように思われるが、仕事に追われる故か、決して五年は長くない。

十四日会

大正十四年を中心にした十四日会が大阪で開かれている。毎月一回必ず開き、教室の先生に出席して貰うこともあつて、教室と卒業生の連絡をやつている。

月一回の開会とは誠に美しい次第である。（編集部）

○

クラス会を催された場合は必ず御通知下さい。在来、こんな場合に、寄せ書きをせらるゝが、編集の都合上、寄せ書きは当分御断り致します字数には制限ありませぬが、先着順に掲載致しますから御含み下さい。

京都大学工学部電氣工学科
同窓會創立総會

昭和二十七年十一月二十三日午後一時より京都大学楽友会館において開かれ、東京、名古屋その他各地から参会する者約百名を数え頗る盛会であつた。

先づ午後一時より加藤教授司会のもとに次の講演が行われた。

一、極超短波通信の諸問題　電気通信研究所　松尾三郎氏

二、米国電鉄界視察談　阪神電気鉄道会社　野田忠二郎氏

次いで午後四時から総会に移り、先ず同窓会創立準備委員長石川芳次郎氏が議長に選ばれ開会の挨拶があつた後、同委員会山村忠行氏より創立の経過並に卒業生の意見調査結果等について報告あつて、会則審議に入り、会の名称を洛友会とし、事務所を母校教室内に置くこと、会則の改正は総会の決議を経ることを要すること、並に会の運営に関する細則は役員会に一任することゝなり、別掲会則が決定した。

更に役員選任の件については評議員の選任は議長一任となり、別表の如く決定した。また評議員満場の拍手をもつて会長に鳥養利三郎氏を、副会長に石川芳次郎、佐藤穩德、加藤信義の三氏を推戴することに決定した。

次いで鳥養会長の就任の挨拶があり、幹事を指名委嘱された。

石川議長の閉会の辞を以つて午後五時創立総会を終了した。

午後六時懇親会を開き、鳥養会長、石川、加藤両副会長の挨拶に始まり、テーブルスピーチになると東京の乙葉信一氏は東京在住者の同窓会設立を熱望せる状況を、林重憲教授は本年度卒業生の就職状況を各々報告し、小宮義和、森藁、小柳美一、交川有等氏は会の運営に対する意見や陳[illegible]について[illegible]を交えてスピーチされ、盛会裡に午後七時半宴を閉じた。

洛友會東京支部
発足す!!

機熟せりというが、京大電気科の同窓会が昨年十一月全国的組織として誕生し、その名も洛友会と決定したので、これまでの東京地方の有志のみの懇親会としてつくられていた洛友会は茲に発展的に解消して洛友会東京支部として新発足することになり、その創立総会が二月十二日十七時より鳥養会長を迎えて東京駅地下レストラン「とうきよう」で開かれた。

国鉄提供の映画「電線路の着氷雪」を鑑賞のうちに会員続々参集して百名を越え、さしも広い大ホールもあまず席なしの盛況となつた。

会の筑木幹事の司会で、先ず佐藤穩德氏議長に選ばれ、乙葉信一氏の支部創立までの経過報告の後、支部会則を審議し、評議員は議長指名となり何れも別記の如く決定した。支部長には佐藤穩德氏を、副支部長には乙葉信一氏を満場一致をもつて推薦した。ついで支部長より別記の通り幹事の委嘱があつた。

支部長、副支部長の就任挨拶の後、鳥養会長立たれて支部発足の祝辭を述べられ、引続き先生が特に現在力を入れられておられる学者、技術者、学生の対外交換のことなどから、スペイン語の重要性、さては先生御自身も「若ければ乗り込んで行きたい」ほどのメキシコの魅力など、教室での講義そつくりの名調子に一同の感激をそゝられた。

先生のお話がすむと鳥養先生を参議員候補に仕立て当選間違なしの法を伝授する方あり、また大正年代のクラス会活躍の報告、そうかと思えば若い者には会費を安くしてくれなどと云つた当人があとで恥づかしくなるようなことまで云い出す者も出て和気靄々の裡に予定の八時も過ぎたので、一同拍手名残り惜しく散会した。

附記

我々が卒業するとき（昭和二十二年）の茶話会の席上、鳥養先生から「人間は良い先輩と、良い後輩を見出すことによつて己れの生命を三倍にのばすことが出来る」との御言葉を頂いたことを思い出す。我々はかく多数の良い先輩を得ている。洛友会の新発足に当り我々自身先ず良き後輩とならねばならぬことを痛感しておる次第である。

最後に洛友会の若い者の集りについて一筆書き加えさせて頂く。我々戦後の卒業生は種々な事情で自分の卒業年次の極く近くの年次の間ですら殆んど連絡かなかつたから、東京へ就職早々に洛友会に出ても窮屈な思いで只黙つて坐つて何百円かの貴重な会費と、何時間かの貴重な時間を使つてくるだけのことになる。これでは意味がないではないか、もつと我々戦後派には共通な話題があるべき、若い者同志連絡をつけて語り合う機会を持らやがては洛友会へも出席し易いようにしようと話し合い、先の松尾幹事の御了解も得て、昭和二十一年卒業以降あたりからの者でそういう集りを始めてから四年ほどになる。新入会員の歓迎などは重要な目的の一つであつたことはいうまでもない。

こうしたよくいえば血気盛ん、わるくいえば不遜な企てを諸先輩は寛大にもお認め下さり、新洛友会発足後は種々の点でこの集り（青年部仮称している）の意見をとりあげて頂いているばかりか財政的援助まで賜つている。これほどの御期待に副うためには、また御指導を仰がなければならないことが多い。宜しく御願い申上げます。

洛友會東京支部
第一回総會

本支部会則による第一回総会は、折もよし加藤、阿倍その他の諸先生方が仙台における春季学会から御帰洛の途中、東京へのお立寄りを願い、気鋭の新卒業生歓迎を兼ねて五月六日午後五時より工業倶楽部で開かれた。

会場正面テーブルには先生方、支部役員、多田耕象氏らの大先輩と今年卒業の新入会員とを向いあつて配し、その他の十幾つのテーブルには明治、大正、昭和の老若を適当に組み合せて席を設けた。青年部の趣向である。定刻頃にはとび入りも何人かあつて予定を超え出席者一四〇名に及ぶ盛況であつた。

佐藤支部長の開会の辭、一同乾盃ののち、多田さんが先ず立つて「学問的技術的先達のなかつた自分の卒業当時に比べていまの卒業生は幸福である。多くの有能な先達から大いに学んで勉強して行くように」と孫に諭すおぢいさんよろしく溫情溢れるばかりに新入会員を歓迎されば、新入会員を代表して新田君より歓迎の席を設けられたことの感激を述べ卒業生を紹介した。

ついで、学生当時猪苗代の発電所へ実習に行つて多田さんや佐藤さんにいろいろ教はつたという加藤先生の回顧談、さては今日の盛況と和やかさを眼のあたりみて「乞食三日したらやめられんように、大学の先生も三日したらやめられんと思いなおすようになつた」という阿部先生の打明け話に、林先生、前田先生の御挨拶がつゞく。この間北野豊君から青年部なるものゝ紹介があり、最後に今後の会の運営に関する意見の交換に入る。

乙葉副支部長は園遊会の計画、洛友会館建設の夢や、趣味部会の結成或は嘗て月々行はれて洛友会発展の基盤になつたという講読会の復活等々を提唱される。特に最後のことは青年部に期待するとのこと。その他クラス会毎にまとまつて行けとの平井寛一郎氏の御意見など、青年部細田氏の名司会ぶりを以てすればまだまだ意見も出たであろうに、かくては果つるところも知らずとの慮れから、佐藤支部長の発声による洛友会万歳の唱和で総会の幕を閉じた。

解散後年度毎に散つて幾組かのクラス会が然るべく行われたであろうことは想像に難くない。「有朋自遠方来亦不楽乎」である。

關西支部の発足

洛友会関西支部発会式は四月十四日午後五時半より大阪市北区堂島中二丁目、中央電気倶楽部で開かれ、出席者百名を超える盛会であつた。

まず石川芳次郎氏議長に選ばれ開会の挨拶があつて、木部山村幹事より洛友会関西支部結成に至るまでの経過と洛友会活動の現況並に地方支部結成の進捗状況など報告し、それより支部会則の審議を行い質疑応答の後可決され、評議員の選出は議長一任となり別表の如く決定した。

支部長としては満場拍手裡に石川芳次郎氏を推し、副支部長は支部長に一任することになつた。

石川支部長の就任挨拶について、鳥養会長は関西支部の発足を祝すると共に洛友会員は色々な意味で互に選ばれた間柄であり、それらの人々が縦に横に相知り相協力する機会を

もつべきものでそれが同窓会の使命であり、学ではなくまたあつてはならない旨を強調、若い人々の積極的な活動を期待すると祝辭を述べられた。

[illegible]副[illegible]長　遥々[illegible]阪本[illegible]述べ、加[illegible]告ずると[illegible]紹介さ[illegible]中の最年長[illegible]同年輩であり若い人々と会う機会を喜び、石[illegible]氏の黒髪論について黒、佐藤、一本[illegible]岐美、[illegible]西、栗本、阪本、[illegible]七方各氏と或は思い出話を或は抱負を語り時間のたつことも忘れ、漸く八時を過ぎて落友会の万歳を唱和して散会した。

懐しの実習（投稿歓迎）

洋服とハッピ

思えば約四十年前のことである。私は三重県四日市の四日市電燈株式会社に実習に行つた。時の技師長は村田さんであつた。

京都から汽車に乗つて草津線に這入つた。何処だか覚えていないが、水害で線路がやられて一駅間徒歩連絡した。その時の暑さを今だに忘れない。

実習では色々やつた。第一に私は修理工場で、コッターピンを造らされた。やつと出来上つたので組長に見て貰つたら合格せず、記念品に貰つたのも滑稽だつた。

引込工事に行つて、電柱には登つたが作業が出来ず降りて来て笑われたのは、今だに耳に残つている。

次いで内線工事の班に加えられて実習した。当時、内線の一班は四、五名の電工が、材料を積んだ荷車を曳いて行く。電工とは言わずに「電気工夫」と言い、皆ハッピ姿だつた。襟に一方は四日市電燈株式会社、他の一方に電気工夫と染め抜いてあつたように思う。

このハッピ族に、実習生だけが洋服であるので第三者から見ると、実習生が班長と思われるのも無理なかつたようだ。

当時は電燈をつけることは経済的に六ケ敷かつたと見えて、町から相当離れた村落に、新しく電気が這入つて行く状態であつた。

朝早く、工夫たちと車を曳いて出掛けた。私にも車を曳かせるように申し出ると、大学生と言うので遠慮する。実習だからと、私は無理に曳いたが、始めての経験なため、簡単な車曳きと思つたのが、仲々六ケ敷い作業だつた。それから、何れの仕事も馬鹿にしたり、軽んじたりしてはならぬと思つた。

需用家につくと、すぐ作業にかゝる。田舎のことゝて、家の前の畑に西瓜が作つてある。需用家の百姓はすぐと、西瓜をもいで井戸に入れて冷やす。工事がすむと、それを取り出して食べさしてくれる。暑さの中をほる〳〵来たので、その甘さつたらなかつた。

百姓家に取つて電燈が始めてつくという喜びに、その工事者に感謝するという純朴さが、今日の世相に照らして見ると、天国のように感ぜられる。

……

或る場合。洋服を着た私が、新設に行つた先の人に組長と間違えられたか、

「どうぞ、電燈一燈、内緒で工事してくれ」と言うのだつた。私は「無智の恐しさ」をしみ〴〵味わつた。そして私は、じゆん〳〵と話して、そんなことの出来ない理由を説いた。

すぐ納得し[illegible]を、私は今だに懐しい一人に覚[illegible]いる。

……

或る場合。私が自転車に乗れるかと聞かれた。私は自転車の稽古で相当、足や手に疵を負い、曲り角でハンドルをきりそこねハ百屋の野菜籠に足を突込んだりして、一応乗れる自信を持つていたので、勢よく「乗れます」と答えた。

そこで私はワットメーター取付班に加えられた。一行四人。メーターを自転車に大切そうにつけて出かける。私は手ぶらで、さつそうと乗つた。四人自転車を踏んで会社を離れた。口笛でも吹きたい楽しい自転車の行楽気分であつた。

四日市を離れ田舎道を走る。だんだん私は疲れて、しんがりから落伍しそうだつた。

目的地は遥かの鈴鹿山の麓。山の上の入道雲を見ると、一層気疲れがした。歯を食いしばつてペタルを踏むのだつた。

工夫たちは平気で走りながら、四方山話を面白そうにやつている。彼等は自転車は下駄のようなものだ。

到頭、目的地に達した。私はホッとした。大きな旧家だつた。宇額をメートルに切りかえるのだつた。

仕事がすんだのは、お昼近かつた。我々は、広い台所の方に案内された。お昼御飯の用意がしてあつた。固辭したが許されなくて頂いた今思うと、その時、弁当を持つて行つていたか記憶がない。

……

火力発電所へ廻つた。スチームにむされた発電所の夏は地獄の釜のようだ。色々の話を主任から聞いた。

私の先輩だと記憶している。その先輩が矢張り茲に実習に来ておられたことがあつたそうだ。

偶々ボイラーの定期検査があつて県庁の役人が来られたという。そこに実習生も検査に立ち会い、役人が小言を云つたらしい。それが技術的のものだつたので、検査官と実習生との議論となり、遂に、腕力沙汰となり検査官がなぐられ、技師長や重役が陳謝に行くという事件となつたという。

それから実習生は外部からの問題には立会禁止になつたという。

武勇伝の一説に耳を傾けて、蚊に咬まれたのを知らなかつた。

懐しの実習の思い出は尽きないが一先づ筆を置く。〔大七。工藤〕

△感謝▽

名簿は着々進捗し、月下印刷中であります。九月一杯には、配布の運びになる予定です。

この名簿に、多数の会社が、広告を出して頂いて、名簿に彩を与えながら御後援下さいましたことを厚く御禮申上げます。

△会費拂込について▽

会の運営については、会費の拂込みが第一要件で御座います。御面倒ですが未拂込みの方々は、同封の振替用紙にて、すぐ御拂込み下さい。

東京支部、中部支部、関西支部、（支部会則にその所属府県名が書いてありますから、そこに在住の方はその支部会員と見なしております）に属する会員は、本部費と支部費と合せて御拂込み下さい。本部で振り分けます。御忘れなく直に御拂込みを願います

【本部会計】

△轉居、轉勤▽

転居、転勤せられたら、すぐ、御知らせ下さい。それによつて名簿の原本を訂正し、もし支部所属の変更があれば、その支部へ変更通知をせねばなりませぬ。更に、宛名印刷機の原紙を張り替え、鉄筆で書き直しこのカードの所属替えをせねばなりませぬ。

このような手続をせねばなりませぬから、異動された方々は、出来るだけ、よく御通知を願います。

原稿募集

△原稿の一行は十六字詰にして下さい。編集の際、助かります。

行数に制限はありませぬ。

△会報でありますから、政治問題だの思想問題だのは御遠慮願います。専ら、学校をしのび、会の発展に関するとか、会員相互の親睦、連絡になることゝか、思い出話、級友の逸話、友人または知人の消息（本人では書けないもの）など、肩のこらないものを歓迎します。

△誌面の都合上、一部の省略、手入れ等は編集部に御まかせ下さい。

△学校教室に関する門外不出の写眞を御持ちの方は御貸し下さい。会報に掲載します。

○次號原稿締切○

第二号の〆切は

九月十日　まで

九月十日と言わず、すぐ筆を取つて下さい。よりよい会報にする為に

△誌上は「とく名」でよろしいが、卒業年度と氏名を必ず明記して下さい。

△漫画とか、絵を入れられる時は、墨で書いて下さい。凸版に取るのに困りますから。

△会報発行豫定▽

会報は出来るだけ回数を多く出したいと目論んでおります。何分にも郵送代が一回八円かゝりますので、これが大きな痛手です。

隔月に発行しても、四十八円の郵送代。それに帯封代。宛名印刷に要する雑費が郵送代にかさむと馬鹿にならないのです。

目下の計画は、偶数月に発行し、出来るだけ月刊までに持つて行きたいと張り切つております。

折角、張り切つておりますから、原稿を送つて下さることが、唯一の推進力なのです。